

やまぐち自然派宣言

自然共生ネットワークを

通じて想うこと

共存から共生へ②

生態系探訪

県内カブトガニの

新たな繁殖地を確認

山口県内のヤマネ・

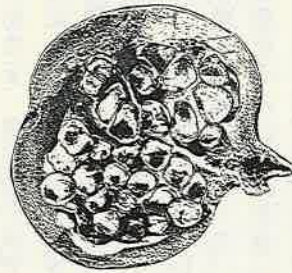
ニホンモモンガの生息調査

リレーミーティングで

地域は変わったか



共生



共生随筆

私たちとコウモリ

城下町長府の金色の小鳥

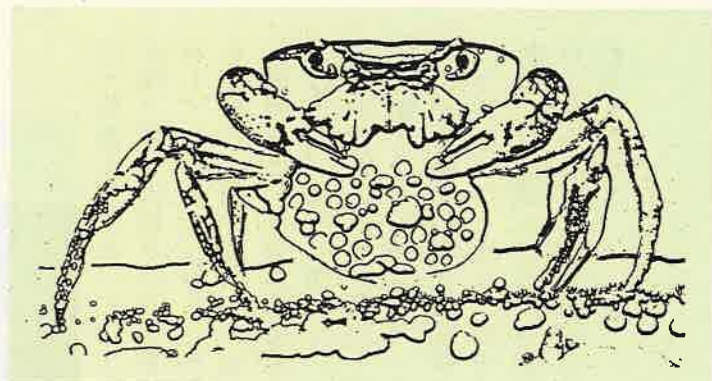
共に生きよう

山口の自然はいま

中郷八幡宮樹林

玉祖神社野樹林

表彰記念樹贈呈式



やまぐち自然共生ネットワーク

平成 21 年 11 月 16 日

自然共生ネットワークを 通じて想うこと

山口自然共生ネットワークの規約のうち「目的」を第三条から見よう。この会は自然活動団体等のネットワークを形成し、情報交換等連携を図ることにより、自然の保全等の活動を促進し、山口県の豊かな自然環境を後世に引き継ぐことを目的とする。なお第四条には「行政機関等と自然活動団体等の情報交換と連携、さらに、この会の目的を達成するために必要な事業」とある。今さらと思



われる方々も多いかと思われるかもしれないが、自分の再確認のために取り出してみた。小生自身、人間以外の生き物に専門的に関わったことがないので、この点では特別に話すこともないのだが、海・山・川・空の生き物に感動のしっぱなしである。子どもの頃、自分の所で飼っていた鳩が死んだ時は無性に哀しく、一週間位は食事も欲しくなく、なんだか自分でも、どうしてそこまで落ち込むのであろうかと思った。

最近では、家内と海辺を見下ろしていると、イルカの大群が東から西へ白い浪を作りながら次から次へと隊列を組み泳いでいた。ざつと百匹はいただろうと思う。これは、下松の笠戸島、白浜の丘から祝島方面を見ていた時だった。余りの荘厳さに圧倒させられた。ダイビングを四十年ばかり楽しんできたが、海の中の別次元、異空間の世界を知るにつけ、考え方にもずいぶんと影響を与えられたと思う。水深二十メートル以上からは、海の底の方へ（浮力の関係で）墜落して行く現象や、恐ろしい生物、大変に美しい魚達、一つ一つ個性の違う魚達に出会った。網にかかった同族の魚達をその目と腸を食いちぎると、新しい魚のそれを食いちぎっていく魚性、実に沢山の感動を与えてくれた。今、大島町にアワサングが群生しているとのこと、時間を見つ

けて実態を知りたいものである。山口県は日本海と瀬戸内海という非常に恵まれた環境を有しているので、近くて便利故、沢山の人が、その喜びを知って欲しいものである。

温暖化という言葉が最近しばしば聞くようになった。海中に潜っていても、はっきりと以前のそれよりか、変化、違いが肌身を通して感知できる。地上では、余りの文明の進展に依り直接その変化を感知する能力を失ったのではないかと思う。海中生物は衣服もなければ、冷暖房システムも実自然界では無いわけですから、より敏感にならざるをえないのだらうと思う。



つい先日、島根県の三瓶山へ視覚障害者の方々が、大阪・岡山・広島・島根・山口・大分からボランティアと共に、登山・ハイキングのために集まった。大分からは盲導犬も一緒に参加した。二歳になるクワン君、初デビューだった。初めての登山ということで少々落ち着きがなかったが、立派に全盲の女性をヘルプしていた。おしっこくんこも、ワン・ツーという発音の違いで催促していた。その光景に多くの人々が感動させられた。



全盲、弱視の人々も登山を通じて大自然に触れる喜びは健常者と同じだと思う。目が見えない分滅多にアウトドアを体験出来ない故、逆に喜びや感動が大きいとも言えるかもしれない。若い時に目が見え、今まで登山もしつかりとして来た人が居られたが、気持ちだけ昔のままで、運動不足の人が、こんなはずではなかった、次に備えて、鍛えて今度はしっかりと手引きができるようにしたいと言う中年の弱視の方がおられた。登山は現役でなければ駄目である。日頃から少しずつ体を鍛え備えておく必要がある。それにしても障害者の方々の頑張りには敬服する。いつも思うのであるが、ボランティアをしてあげているのではなく、障害者の方々の頑張っておられる様子に、こちらこそ元気を分けてもらっているのだと思う。今回のボランティアの中でも、八十五歳の小柄な女性であるけれど百名山に六十から始めて、ほとんど登られている方。元県庁の部長さんご夫婦のリードには頭が下がる。その他、県内の有力な登山家達もいざという時にしっかりサポートしてくれるのはとても心強く嬉しいことである。大自然から受ける恵みと厳しさを身にしみて体験しておられるからだと思う。

最後に八代のツルのことに触れてみたい。地域の人々が長い間涙を流す程の愛着をもつ



て、いろいろと活動しておられる。これも驚きである。生き物にはそれぞれの特性、性質がある。人間同士ですら理解し合えることが難しいことであるが、その道の研究者(大学、民間の人を問わず)より、その特性、性質をしっかりと現段階では最高の形で聞き出し、鳥インフルエンザにより壊滅という事態にならぬ様、知恵を傾ける時である。死して後動くでは最低である。そう言うベクトルに大きく舵を取ることが、人類が明日生き延びることのできる唯一の方法だと思う。もはや、一地域の問題だと見逃すことは出来ない。

(開村修三)

共存から共生へ ②

用語の変遷をめぐって

「人と自然との共存」

屋久島の場合、優れた自然環境と人間の生活との共存が真剣に議論され、(屋久島)憲章が制定された。

条文

1. 略

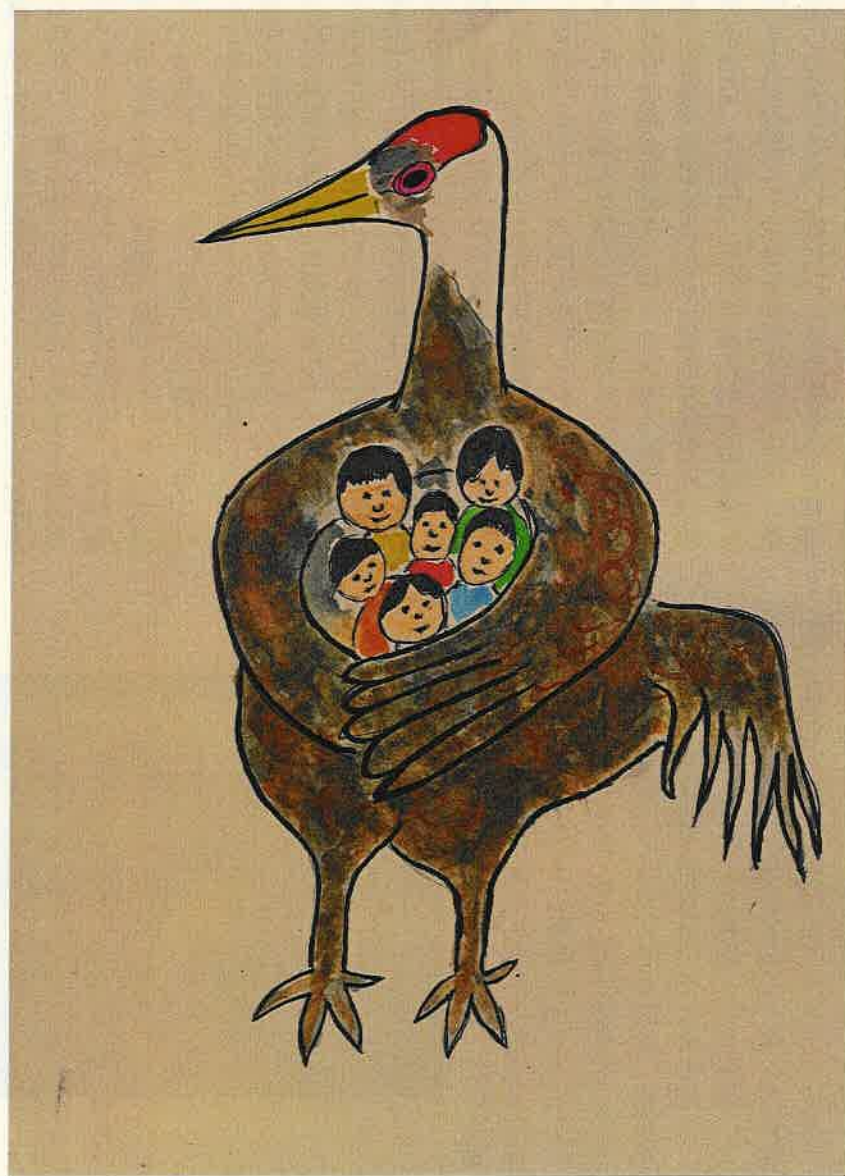
2. 私たちは自然との関わり方を身につけた子供たちが、夢と希望を抱き、世界の子供たちにとって憧れであるような豊かな地域社会をつくります。

3. 私たちは、歴史と伝統を大切にし、自然資源と環境の恵みを活かし、その価値を損なうことのない、永続できる島づくりを進めます。

4. 私たちは、自然と人間が共生する豊かで、個性的な情報を提供し、全世界の人々と交流を深めます。

世界の自然遺産 屋久島(一九九四)

田川英雄著(NHKブックス)より



生態系探訪

県内カブトガニの新たな繁殖地を確認

山口カブトガニ研究懇話会 原田直宏

県内のカブトガニの繁殖地として確認できているのは、平生湾、山口湾、千鳥浜の3ヶ所だけである。繁殖地とは、産卵している砂場と幼生が生息している干潟がそろっている区域をさしている。成体については、移動能力があるので範囲を限定できない。移動した記録としては、大分県杵築市で標識された個体が上関で網にかかったものがある。

平生湾については、平生町が、産卵場の造成、卵塊と幼生の調査をするなど保護に取り組んでいる。また、幼生放流、カブトガニ教室の開催など、啓発活動も行っている。年に数回はテレビや新聞などで報道されてもいる。環境が良いとはいえないが、繁殖はどうにか維持されている。湾内で網にかかり始めたとの情報もある。

山口湾については、このところ良い情報は聞かない。樺野川河口域・干潟自然再生協議会カブトガニワーキンググループが、30数名の参加を得て行っている大規模な幼生調査は4年目になったが、減少するばかりである。

ただ、昨年となりの秋穂湾で僅かではあるが、卵塊・幼生とも確認した。ここで多くは期待できない。繁殖地としては、秋穂湾と山口湾は同じ区域とするのが適当だろう。

カブトガニの繁殖地としては、千鳥浜は下関市から旧山陽町の範囲と扱っている。とても広い干潟の状態は様々で、腰まで埋まりそうな泥質のところもあるし、全くの砂地もある。干潟は常に変化し、幼生の生息密度も変化する。昨年には、記録するのが大変なほど多数活動していた澤に、今年はほとんど見つからない、ということもある。「減っているのですか」と聞かれることがあるが、答えにいつも困ってしまう。

厚狭川河口に広がる干潟は、流れ込む川と砂泥質の干潟があり、繁殖地でもおかしくない。しかし、1999年8月に調査したときには、悪くは見えない干潟に幼生を見つけることはできなかった。10年ぶり10月17日に調査にはいり、7歳の幼生(2匹だけだが)と護岸下の狭い砂場(写真①)に1歳幼生の塊(写真②)を4つ確認することができた。(この時期には、多くの1歳幼生は、産まれふ化した砂場から干潟へ移動しているはずだが。)幼生がいた護岸近くの干潟は適度の砂泥質であったが、沖の大部分は、これでは棲んでいないだろうなと思わせる底質であった。ベン

トスも貧弱そうである。この河口干潟で繁殖が安定して続くとは考えにくいだが、来年以降調査の頻度を上げたいと思う。
他にもまだ、一度行った調査にはひっかかりなくて、僅かながら繁殖している干潟が残っているかもしれない。情報があればぜひお知らせいただきたい。



↑写真①



←写真②

山口県内のヤマネ・

ニホンモモンガの生息調査

山口哺乳類研究会 田中 浩

哺乳類の生息を確認するのは難しいことです。多くは夜行性であり、森林部に生息しているものが多く、生活史や詳細な生態がわかっていないものもあります。山口県内に生息していると考えられますが、ほとんどの人がみたことのない哺乳類の代表格として、ヤマネとニホンモモンガ（以下、モモンガ）をあげることが出来ます。ヤマネは齧歯目（げっしもく）ヤマネ科に属し、日本固有種で、天然記念物です。山口県レッドデータブックでは絶滅危惧ⅠB類、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧種に指定されています。モモンガは、齧歯目（げっしもく）リス科に属し、日本固有種で、山口県レッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。これまで、両種とも樹木の伐採時や鳥類用巣箱利用など偶然に発見された例を除いては、山口県内での継続した調査はなされておらず、発見例も非常に少ないです。

野鳥用の巣箱を利用することがあることから、ヤマネやモモンガの調査に巣箱を用いた調査が1980年以降はじめられました。ヤマネ用巣箱は鳥類の利用を抑えるため、幹がわに出

入口を設置したものを用い、樹木に接する面には幹との隙間を作るために、厚さ2 cm程度の木を出入口の上下につけたものです。モモンガは従来の鳥用巣箱と同様なものとし、出入口の径を4 cmのものを使っています。ヤマネ用巣箱は地上から1 mから1.5 mの高さに、モモンガ用巣箱は3〜4 mの高さに設置しました。

昨夏、調査は巣箱を設置することから始めました。これまで、ヤマネが偶然見つかったのは、岩国市錦・本郷、周南市鹿野・須金・新南陽、山口市徳地です。モモンガは岩国市錦と周南市鹿野の2か所のみです。今回はこれらの地域を中心に巣箱を設置していきましました。まず、地形図をたよりに設置可能な場所に目星をつけ、県東部をまわり、山にはいります。地図上では良いと思っていた場所も、いざ行ってみると、下草のクマザサ類が背丈以上生い茂り、とても設置できるような状態でない所がたくさんあり、巣箱を車に積んだまま帰ることも多々ありました。それでも多くのボランティアの方々に助けていただき、11月の終わりには、合計で300個以上の巣箱を設置することができました。

調査は巣箱をかけ、利用を待つだけですが、これが意外と厳しいのです。簡単には利用してくれません。夏、巣箱には、クモ、アリ、

ドロバチ、カマドウマの仲間が利用を始めました。ふたを開けるたびにガツカリきます。秋になり、少し様子が違ってきました。ヤマネ用巣箱の出入口から葉がのぞいています。



巣箱の中は葉でいっぱいです。ヒメネズミが持ち込んだものです。中にいるのは確認できませんでしたが、まずヒメネズミが利用し始めました。11月、岩国市錦でついにヤマネの利用が確認できました。巣箱の中にはスギの樹皮を細く裂いて持ち込んでつくった球形の巣がみられます。ゆっくり取り出し、少しずつ樹皮をのけていきます。なんとヤマネが丸

くなつて眠っています。嬉しくてたまりません。写真を撮って再び巣材にくるみ、元の場所に戻しました。12月には同じ巣箱にさらに1頭ヤマネが加わり、仲良く2頭で冬眠している様子を見ることができました。山口市徳地でも巣箱内で冬眠しているヤマネを確認することができました。しかし、モモンガは巣箱を利用することはありませんでした。

春になりモモンガ用巣箱は、カラ類を中心とする野鳥が利用するようになりました。90パーセントを超える割合で野鳥が繁殖のため利用していました。幹側に出入口のあるヤマ



ネ用巣箱の野鳥による利用はほとんどありませんでした。今夏までモモンガの巣箱利用は、残念ながらありませんでした。秋、鹿野に設置した巣箱ついにモモンガが利用してくれるようになりました。出入口が少ししかじられ大きくなり、持ち込んだ巣材であるスギの樹皮が、出入口からのぞいています。出入口を軍手でしっかり閉じて、巣箱を樹から降ろします。大きなビニール袋で巣箱を包み、ふたを開けると中からモモンガが出てきました。感動です。春、カラ類が利用した巣のうえにモモンガがヤマネよりさらに細く裂いたスギ

の樹皮の巣材で巣を作っていました。9月、10月にかけて、巣箱内でヒメネズミが子育てをしてくれました。10月、ついに巣箱内でヤマネが子育てを行っているのが確認できました。



しかしながら、巣箱の利用はわずかです。ヤマネは、岩国市錦・本郷、周南市鹿野、山口市徳地の4ヶ所、計8個の巣箱を利用していました。モモンガにいたっては、周南市鹿野での1個の巣箱の利用のみです。地道な調査ですが、今まで分からなかったことが少しでも明らかになっていくのは楽しいことです。

リレーミーティングで 地域は変わったか

(二) 周南市八代

平成16年7月に当協会が発足し、翌17年1月にやまぐちリレーミーティングが開催されたが、振り返るともう5年も経とうとしていることに感慨を覚える。発足時、私が事務局を務めるナベヅル環境保護協会の会長が当協会の会長に就任したことに伴い、事務局の重ね餅は私にとって初めてのことであり、これは大変なことになったと頭を抱え込んだのを記憶している。しかし、選任された理事さんは皆、県内で素晴らしい活動をしておられる方々ばかりで、お話を交わすうちにこれはすごい交流の場に参加することになったと実感したものだ。

さて、名称も原案では「エコミーティング」であったが、会長の会員同士の「絆」を大切にしたいとの思いから「リレーミーティング」とされ、企画の段階から何でもありの楽しい準備となった。基本的にはツルの越冬する八代を皆さんに紹介し、理解を深めてもらおうという意図で、ナベヅル環境保護協会のメン

バーが中心となり原案を作成したが、1泊2日では消化し切れないくらいのアイデアが続出し、絞るのに苦労したほどだった。1日目は「ツルと文学」「ツルと人々の暮らし」「ツ



ワークショップの力作

ブルとの共生を考える」の3つのワークショップごとに区内の散策を含むミーティングを行った後、ナベヅルとその保護の概要の説明により皆さんに理解を深めていただき、翌日のワークショップごとの発表に備えた。夜には参加者と地元との交流会、宴は延々と翌日の未明まで続き、文字通りの交流は多大な成果をもたらした。(と思われる。)

翌日には環境省野生生物保護課長に基調講演をいただいたが、環境省の関係者が八代を訪問する最初の機会となったことは大きな成果だった。その後、ラムサールセンター、中村玲子さんのコーディネートによりパネルディスカッションが行われ、特にツルと同時に「田んぼ」を守ることの重要性について認識を新たにされた。お昼の「八代特製 豚汁と八代米のおにぎり」で八代を満喫していただいた後、各ワークショップの発表となったが、それまで我々が気づかなかった視点に深くうなずき、単純な勘違いに会場が哄笑の渦にという場面も。最後に私の敬愛する詩人磯永秀



「鶴」を刻んだ詩碑

雄さんの詩「鶴」を刻んだ詩碑の設置式では紹介者の私が感激のあまり、涙してしまったこともよき思い出となった。

鶴

鶴がくる シベリアから
ふだん着のまま海をわたって
晩秋のつつましい山奥の村に
恋人のように そっと夜来る
なじみの田ん圃に播き餌がいつぱい
霜にかくれて鶴を待っている
いつからそれがそうだったか
村人も知らない
鶴も知らない
人間と鳥との
貧しい心を引き合わせたのは
おそらく
あの青い天であろう

磯永 秀雄

私自身平成18年に当協会の事務局を辞め、以降、一会員としてのお付き合いとなったが、このミーティングが与えてくれたさまざまな情報や交流はその後も大きな財産としてツル保護活動に生かされている。特筆すべきは皆さんの発案やご意見が、その後策定された「ツルと人・共生の里」再生構想に生かされたという点である。この構想はツルの増羽のためには越冬環境の整備のみならず、ツルと人

との共生のための環境整備が不可欠との認識、また、鹿児島からのツルの移入に向けて、地元における受け入れ態勢の基本的スタンス及び、プロジェクトに対する理解を得るための説明責任を示すものとして位置付けられた。当協会が中心となり県、周南市、関連各課21名の協力を得て平成17年に地元の8団体、市、県の合意の下に策定された。内容は生息環境の整備、共生のための地域振興事業の展開、地域交流の促進、人づくり事業の展開、保護推進体制の確立とミーティングで取り上げられた内容とほぼ、オーバーラップしている。なかでも餌場や観光客対策、農林業とツル、新産業振興と高齢者ウエルカム事業、民間企業との連携や学校教育への働きかけなどはミーティングの知恵とアイデアが大いに生かされている。

しかし、その後のツル保護活動も皆の必至の努力にもかかわらず増羽という結果の出来ない苦しい状況が続く。そんな中で、「構想」を一つ一つ地道に実践していくことが地元としての王道と信じてやってきた。平成18年には周南市、出水市、コウノトリの豊岡市、トキの佐渡市の4市長が集いサミットを行うという画期的な交流事業を行った。今年は4回目が出水市において開催される。共生を模索する農業振興では有機栽培による「ツルの里

米」の栽培を主眼とした農業法人が立ち上がった。見学に行っても説明がないとの声に「ツルの里案内人」を開始した。企業とのコラボ



ツルの里案内人

では(株)ライフによる地域貢献型クレジットカード、アサヒビール スーパードライキャンペーンによる寄付など広範な広がりを見せている。

ミーティングという種はこんなにも多くの企画やアイデアを授けてくれた。今、その感慨とともにやまぐち「リレーミーティング」および山口自然共生ネットワークが県内に多くの大樹を育ててくれることを祈らずにはいられない。

ナベツル環境保護協会 事務局 末松幹生

共生随筆

わたしたちとコウモリ

秋吉台科学博物館 石田麻里

10月31日はハロウィンでした。日本ではあまりなじみのない行事ですが、最近では雑貨屋さんの店頭にはハロウィン用のお菓子や飾りなどが並び、コウモリの形をしたものも多く出回っていて、コウモリ好きにはちよつと楽しい時期です。しかし、ハロウィンのテーマは「不気味で恐ろしいもの」。かわいらしくアレンジされているとはいえ、幽霊や魔女などと一緒に行われているのを見るのはなかなか複雑な心境です。

中国や台湾では、コウモリは古くから縁起の良い動物されてきました。コウモリを漢字で表した時(蝙蝠)の2文字目の発音が「福」につながるためです。特に5匹のコウモリを描いた「五蝠」は、長寿、金運、出世、健康、繁栄を表すおめでたい絵柄とされ、建具や茶器などに使われています。

日本でも江戸時代には「子守(こもり)」や「川守(かわもり)」として好まれたよう、着物や根付けのモチーフとして使われていました。また、長崎の有名なカステラ屋さ

ん「福砂屋」では商標に、広島県福山市では市章に、コウモリが使われています。

現在の日本でのコウモリに対するイメージはというと、人によってさまざまなようです。コウモリの観察会などで参加者にコウモリのイメージをおたずねすることがありますが、「吸血鬼」などのイメージから怖い動物とされている方もいれば、夕方に川や池の上空で飛んでいる姿を見て「市街地にもいるんだな」と思うくらいで特に嫌っていないという方もいます。また「コウモリ」洞窟「山奥」というイメージからか、市街地で飛んでいるのは鳥だと思い、身近にはいないので関心を持っていなかったという方もいらっしゃいます。たしかに、日本に生息しているコウモリのは大半は洞窟や森のある山間部に生息しています。しかし、市街地に多く生息し、むしろ山間部には少ない、というコウモリもいます。それは別名「イエコウモリ」と呼ばれる、アブラコウモリです。主に家屋の羽目板と壁の間や瓦の下、雨戸の戸袋の中、換気口などをねぐらにしています。コウモリを気持ち悪いと思っている方にとっては恐ろしい事実かもしれませんが、彼らはこんなに私たちの身近に生息していて、しかも役に立つ動物でもあるのです。



アブラコウモリ

日本に生息しているコウモリは、南西諸島にいるオオコウモリの仲間をのぞくとすべて昆虫を食べるコウモリです。種類によって食べる昆虫の種類が違っていますが、多くのコウモリは一晚に体重の3分の1から3分の2もの重さに相当する昆虫を食べます。これは、蚊程度の昆虫に換算するとおよそ500匹にもなるといえますから、彼らが食べる昆虫は膨大な数になるでしょう。コウモリのおかげで虫に刺される回数が減っていると思うと、ちよつと親しみが湧いてきませんか？

城下町長府の金色の小鳥

山口県樹木医会 殿井正博

城下町長府には南北に数百メートル「乃木さん通り」が走っている。この「乃木さん」とは、明治天皇に殉死した乃木希典將軍（1849〜1912）のことで、その北の端近くに浄土真宗正円寺がある。この通りより石段を四〜五段上がった山門から本道方向に大イチョウが見られる。胸高周囲7.85m、高さ20m、横に広がった枝には「乳の下垂」が連なっている。この「正円寺の大イチョウ」は昭和44年に県指定天然記念物となった県下有数の巨樹である。



「乳の下垂」とは、枝や幹から垂れ下がる気根状のものを言い、樹齢の高いイチョウにしばしば見られる。

長府の町では、この正円寺の気根「乳」を削り、煎じて飲めばお乳の出が良くなるとの



伝承がある。全国的にも、杜寺境内等に植えられ乳房にも似た形状から、古来より「乳」のあるイチョウは産婦の信仰対象とされている。

イチョウ（公孫樹、銀杏、鴨脚子）について思いつくままに述べてみよう。

学術名 Ginkgo biloba 我が国に現存する最も古い木本植物（樹）の一つで、ダーウインはイチョウを「生きている化石」と言った。裸子植物の仲間、そのうちソテツの仲間とイチョウのみが精子（鞭毛で動く。すごい！）による受精を行う。一属一種（イチョウの親戚はいない）である。葉は扁平な扇形だが樹木学では針葉樹類に含まれ雌雄異株（ヒトと同じで雄木と雌木がある）である。

現存自生地は中国の限られた地域のみで、日本では約100万年前に一度絶滅した。現存のもののは14世紀頃渡来したと言われている。

ここで紅葉の良否はその年の天候次第であるのに、イチョウが毎年変わらず美しい黄葉を見せてくれる理由を考えてみよう。

乱暴な物言いを許してもらえば、樹の葉の色素は緑（クロロフィル）、黄（カロチノイド）があり、普段は緑が多い為緑色だが、秋に緑が分解され黄が残されたのがイチョウ等の黄葉。（緑＋黄＝緑黄；黄葉）

葉で作られた糖で赤（アントシアニン）が合成され、かつ緑が分解されたのが紅葉。（緑＋黄＋赤＝緑黄赤；紅葉 赤黄の割合でいろいろな紅葉色となる）

糖の合成はより暖かくて秋の日差しが強いほど増し、糖から赤への変化は最低気温が8℃以下で起こる。すなわち昼夜の温度差が大きいほど紅葉は鮮やかになる。

結論は、もともとある黄は影響を受けないが合成される赤はお天道様次第と言うこと。

金色の小さな鳥の形して

銀杏散るなり夕日の丘に

与謝野晶子

さあ、今年も正円寺に「金色の小鳥」を狩りに行こう！

共に生きよう

CONFE リーダー 平田悦也

私たちの身の回りにはさまざまな環境学習講座が行われています。環境学習を行う理由として、地球環境問題の深刻化により人類の生活が脅かされることを防止し、人類の持続的成長、発展を図り、さらには、自分自身が体験した素晴らしい自然景観を後世に遺し体験してほしいといったことが挙げられるかと思えます。

地球に居住する限り、自然環境は人類において欠かすことのできないものであり、また、地球環境問題は、教育、心理、医学、政治、経済、法律、機械、建築といったあらゆるジャンルに関わってくるため、地球環境問題に対し、人々が共通した正しい認識を持つ必要があるといえます。

私は大学院で地球環境問題について学んでいます。しっかりと机上で学ぶことも大事ですが、実際に現場に行き、地域の方々と共に、自然環境を見つめることも大切だと考えます。そのため、これまで多くの自然体験活動に関する講座やボランティアに参加しました。まだまだ知らないことが多く、参加するたびに多くの感動に出会います。

以前、干潟観察会で、アラムシロという貝

が、ある場所に向かって漂っている様子を見ました。アラムシロは、「海の掃除屋」と呼ばれています。死んだカキ、あるいは、死んだ魚といった有機物にアラムシロが集まり、分解します。「海の掃除屋」と呼ばれる理由は、砂浜や海に漂う死骸を分解し、きれいにするからだといわれています。自然の中に住む動植物は、それぞれ意味があって生きているのだということ、アラムシロの行動を見ることが改めて感じました。しかし、山口県内の干



潟すべてが、アラムシロが活動できる場所であるとは限りません。写真のように、ごみが散乱している場所がいくつかあります。このような場所に、カキや魚は生息することができません。海を掃除してくれるアラムシロは生息することができません。



このように、実際にフィールドに出てアラムシロの生き様を見るだけでも、気付くことはたくさんあります。私は、「気付かせる」手助けをすることが、自然観察指導者の役割であると、干潟観察会から学びました。「教える」という行為は、知識を相手に身につけさせるよう導くことをいいます。導く、つまり気付かせるということです。よく見て、よく聴き、よく対話をすることで、気付きの度合いは高まってきます。一方的な講義形式では気付くことができません。

自然環境は、建物の中では体験することができないことを体験させてくれます。そして、建物の中では考えることができないことを考えさせてくれます。

現在、私たちは、地球から生を受けています。水を飲み、食べ物を食べ、呼吸をしています。周りには、山・川・森・海があり、お

米や野菜が育つことのできる大地があります。私たちは、ありとあらゆるものを地球から得ています。なぜ水を飲むことができるのか。食べ物はどこからやってくるのか。それを一人でも多くの人に考えさせること。そして、お米や野菜が育つことのできる大地があるということを感じさせること。それが私たちの使命ではないでしょうか。大量のごみが捨てられる現状を見ても、私たち人間は地球に対し、感謝の気持ちを忘れかけているような気がします。一人ひとりが地球に対し感謝の気持ちを持つためにも、フィールドワークは必要不可欠です。その際、知識を備えた人材が必要になってくると思います。私はまだまだ経験不足であり、知識不足ですが、決してゼロではないと思います。今、自分が持っている知識がゼロではないのであれば、少しでもそれをみんなに分ち合い共有したいと思っています。時間を共有すること。知識を分かち合うこと。それは、共に生きることです。

最近メディアで何かと「環境」や「共生」が取り上げられています。テレビなどでは気付くことができないことを「気付かせる」。そのきっかけを与えたり与えられたりして、みんなが共に楽しんでいける環境がもっと増えてほしいと思います。

山口の自然は今

山口県自然記念物

中郷八幡宮樹林

山口市小郡上郷二六一二
平成二年三月三十一日指定

中郷八幡宮は小郡の街を一望できる小高い丘にある。小郡の町からはこんもりとした森のある丘は目立ち、直ぐに八幡宮が分かる。



丘の周囲は住宅地となり、周囲の環境から孤立したうつそうとした樹林が本殿の後ろに広がっている。踏み跡をたどって樹林の中に入るとコジイやアラカシの樹が目立つ。十月中



旬、熟れたシイの実はまだ落ちていない。さらに奥に進むと大きな樹が倒れ、空間が広がっている。シイは太木になると強風などにより倒れることがある。林の中をさらに進み獣道を探してみるが、周りが住宅地になっているためか、明瞭な道はなかった。

社殿横の藤棚の下には今から約二千年前の弥生中期の中郷遺跡（貝塚）があったことが記され、山口市指定遺跡となっている。ハイガイやマガキの他、土器や石器も出土したとのことである。眼下にはかつて海が広がっていたことが想像できる。参道にはサクラがならび、三月〜四月には多くの方を楽しませるだろう。

玉祖神社（たまのおやじんじや） 樹林

防府市大字大崎一六九〇

昭和六十一年三月三十一日指定

玉祖神社は佐波川沿いに広がる田園の中にあり、こんもりとした森が目立つ。本殿の後ろにスダジイを中心とした照葉樹林が広がっている。面積の広い樹林ではないが、高木層



としてスダジイ、亜高木層としてモチノキやクロキなどがみられる。境内や周りの道から樹林に入ると、コントラストが大きく、何か不思議な感じがする。ヒヨドリなどの野鳥の声がこだまして、とても落ち着く。林内を歩

くと落ち葉がつもり、ふかふかして気持ちいい。いつも入っている山の森と違い、平地の森も趣がある。林縁では暖地性のチョウであるムラサキツバメを、林内ではクロコノマチヨウをみることができた。境内は、よく手入れされ、落ち葉もほとんどない。社務所の横には、佐波地域で飼われてきた山口県の天然記念物である黒柏が飼育されている。緑紫黒光沢の羽毛をもつ日本鶏を見ることができ、その威風堂々とした姿に圧倒される。



生物多様性条約第10回締約国会議

（COP10）ロゴマーク及びスローガンが決定

「生物多様性条約締約国会議」は概ね2年に1回開催されており、第10回目の会議が来年の10月名古屋市において開催されます。

このたび会議のロゴマークとスローガンが発表されましたのでお知らせします。

「ロゴマーク」



日本の折り紙を円形に配置し、中央に人を配することにより、人類と多様な生きものの共生を表現しています。また、人間の親子は、豊かな生物多様性を将来に引き継いでいこうという思いを表現しています。折り紙は日本の知恵と文化を象徴するものです。

「スローガン」

いのちの共生を、未来へ

（英語）Life in harmony, into the future

このスローガンは、COP10 ロゴマークに対応するかたちで、未来に向けた人類を含む全てのいきものとの共生を表現しています。COP10 の共通テーマを踏まえ、地球上の豊かな生物多様性を次の世代に引き継いでいくという決意を表しています。

「環境省ホームページより」

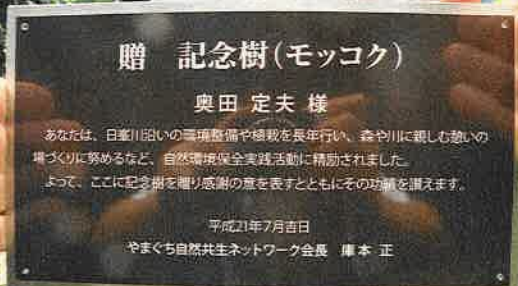
表彰記念樹贈呈式

5月30日(土)、山口県セミナーパークで開催した総会において、山口県の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐことを目的とした自然環境保全活動に顕著な功績のあった奥田さんと伊藤さんのお二人を表彰しました。お二人にはその後副賞として、希望される樹木の苗とプレートを贈呈しました。贈呈式の様子とお二人からいただいた手紙をご紹介します。どちらも大変すばらしい場所なのでぜひ一度足を運んでみてください。

7月24日(金)奥田定夫さんへ贈呈(美祢市)



右が奥田定夫さん、奥がモッコク



贈 記念樹(モッコク)

奥田 定夫 様

あなたは、日蓮川沿いの環境整備や緑化を長年行い、森や川に親しむ憩いの場づくりに努めるなど、自然環境保全実践活動に精励されました。よって、ここに記念樹を贈り感謝の意を表すとともにその功績を讃えます。

平成21年7月吉日

やまぐち自然共生ネットワーク会長 岸本 正



奥田さんが手入れしている市道沿い(上)。市道の下は美しい溪流です(左)。如意岳、桂の大本へはここを通ります。

さかのぼる事二十四年余り、昭和六十一年より今日に至っています。思いつきは毎年続けていた町道の草刈り作業の休憩中に川へ水を飲み下り、しばらく休んでいる内に景色の良いのに気が付き、周囲を整備し環境をよくしようと思いつきました。

最初の作業として、藪切り、草刈りなどの作業中に色々な粗大ゴミが目につき、取り除くのに苦労をしました。そして、足元の危険な場所には石垣などを組み安全を図り、やがて整地が完成したので、樹木、花木等の植え付けをするようになりました。

桜、紅葉、檜、銀杏、榊、山茶花、南天、紫陽花、躑躅、その他。その後の管理は、遊歩道を設け、枝切り、草刈り、崩れた箇所等の整地、又、災害で倒木したり虫食いの被害が起きる為に補植し、大雨時による河川の漂流物を取り除く作業等を行っています。今後は、道路の上下の景観を良くし、そして、できれば水車を作り、回しながら人の集まる憩いの場を広めたいと思っています。

最後に一言、先日、記念樹贈呈式に参加された関係者の皆さんには、大変お世話になり、ありがとうございます。

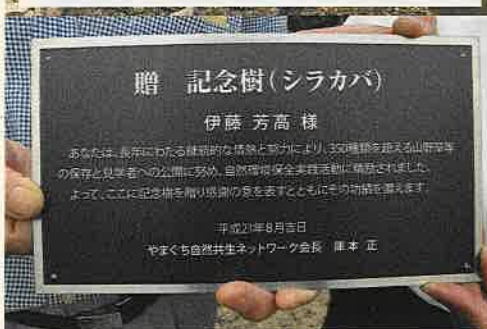
「記念樹モッコクはすくすく育っています。皆さん方も元気で」

美祢市秋芳町嘉万日峯 奥田定夫

8月5日（水）伊藤芳高さんへ贈呈（周南市）



伊藤芳高さんとシラカバの苗木



伊藤さんの私有地（山野草のもり）への入口（左上）。

植えてある山野草の脇には名札が立ててあります（左中）。

手入れされたアカマツ主体の山、小さい頃走り回った懐かしい裏山を思い出します（左下）。

去る五月三十日、やまぐち自然共生ネットワーク総会にて表彰をして戴き、私光栄を感じ、有難く感謝致しております。

私は、大正生まれの八十六歳で御座いますが、こんなに元気で生きられようとは思いませんでした。これも野草の生育を日夜念じているお陰かと思っています。生来園芸が趣味で色々な植物を育てておりましたが、年をとって昔の事を思い出し、野草を集めてみたくなりました。

七、八十年昔は田圃の肥やしといえば芝草しかありませんでした。私も子供の頃、父母達の草刈りについて山へ行き、色々な草花を採って遊んでいたのを思い出します。道辺に時季、に色々な花が咲いていました。蒲公英（タンポポ）、桔梗（キキョウ）、女郎花（オミナエシ、毎百合（ササユリ）、その他時季、の野草の花がありました。昔の面影はなくなりました。私は、自分の山に山野草を残しておきたいと思い立ち、十二年前より山野草の植栽を始めました。現在までに植え付けた数は三百五十種余りになりますが、中には不適地であったり、管理が不十分であったりで全部が繁殖してはいませんが、趣味のある方々が自由に見てくださっております。今後ともできる限り頑張って管理をしてゆきたいと思っています。辺鄙な所ですがご覧になってください。

周南市鹿野上 伊藤芳高

お知らせ

祝第10回やまぐち県民活動

パワーアップ賞受賞

県では、特に優れた県民活動を行う県民又は県民活動団体を表彰する、やまぐち県民活動パワーアップ賞を実施していますが、今年度の表彰団体に、やまぐち自然共生ネットワーク会員の「秋吉台パークボランティアの会」の活動「秋吉台の自然環境の保全・再生活動」が選ばれ、10月16日（金）二井知事から表彰状が授与されました。

ネットワーク会員からは、19年度の「NPO法人周防大島自然体感クラブ」、20年度の「NPO法人子ども劇場山口県センター」、
「錦川流域ネット交流会」に続いて4団体の受賞となります。
心からお祝いを申し上げます。

自然共生手づくり事業募集中！

県では、環境学習推進センターと連携して、身近な自然とのふれあい活動や保全活動など、県民が主体となった取り組みを支援する、「自然共生手づくり事業」を実施しています。具体的には、自然環境の保全のために行う

フィールド整備（柵・看板の設置、清掃、遊歩道の整備等）に必要な経費を20万円を上限に助成するといものです。

今年度の募集団体枠にまだ余裕がありますのでぜひお申し込みください。

【問い合わせ・申込先】

環境学習推進センター

（財）山口県ひとづくり財団県民学習部）

電話083-987-1110

<http://eco.pref.yamaguchi.lg.jp/learning/index.php>

※申請様式等詳細は、右のホームページで

ご確認ください。

新規会員募集中！

10月末会員数は、個人会員116名、団体会員58団体です。今年度に入って団体では、

「山口自然と緑の会」「森林インストラクター山口会」「山口カブトガニ研究懇話会」の

3団体が入会されました。山口県の豊かな自然環境を次世代に引き継ぐためには、いろいろな団体や個人が情報交換しながら連携していくことが大切です。

近所やお知り合いの方に声をかけ、ネットワークの輪を広げましょう！

編集後記

8月の衆議院議員総選挙で自民党が大敗し、民主党政権が発足しました。鳩山首相は脱官僚、政治主導・国民主導による新しい政治へ180度転換することを表明しています。これからどう変わっていくのか、私たちの生活が豊かになることを願っています。

共生第9号では、鳩山首相が勝負ネクタイとして締めている金色のネクタイにあやかって、表紙の文字色を「金色」にしました。

執筆いただいた皆さまには心よりお礼を申し上げます。

皆様のご意見、投稿をお待ちしています。

編集係 内田



